

日韓両言語の意志、推量を表す助動詞 —述語組織全体の対照研究にむけて—

李泓馥

1. はじめに

現代日本語の意志、推量の表現に用いられる、動詞語尾としての形式には、いわゆる助動詞の「ウ(ヨウ)」がある。一方、現代韓国語の意志、推量の表現に用いられる語尾としての形式には一般的に「keyss」¹と「li」があり、両者は意志、推量を表しうるという点で重なるものの、相違点もある。

本稿では、日本語での意志、推量を表す助動詞をめぐる議論を参考に、韓国語のこれら二つの形式について考え、両言語の形式自身の性格を対照しながら把握する。そこで用いるのは、個別的な意味用法とは別に用法全体を貫いてある形式自身の性格を規定するという叙法論的観点であるが、このような観点から助動詞を把握するという見方は、意志、推量の助動詞の対照研究に限るものではなく、述定形式全般にわたる総合的な対照研究へと展開できるものであると提案するものである。

2. 尾上圭介(1997a, b)における「ウ(ヨウ)」の叙法論的把握

尾上氏は意志、推量の語尾「ウ(ヨウ)」について叙法論的観点から次のように把握する²。

一般に「ウ(ヨウ)」は「意志」「推量」を表すとされるが、実は下のように、終止法と非終止法では全く意味が違う。

(終止法)

(1) これをあげよう。(意志)

(2) この中にはすでに事件を知っている人もあろう。(推量)

(非終止法)

(3) あるうはずもない奇跡を信じてしまった。(可能性)

(4) あるうことかあるまいことか、とらえてみれば息子だった。(妥当性)

例のように「ウ(ヨウ)」は、終止法では「意志」、「推量」といった、いわゆる主観性が色濃く感じられるような意味が現れるが、非終止法ではあまりはっきりした意味はとらえにくく、あえて言うなら「可能性」「妥当性」などと呼べそうな意味が現れる。このような事実に対して、尾上(1997a, b)では、助動詞というのは意志、推量といった意味対応のマーカーではなく、現実領域か非現実領域³かを語り分ける述べ方、叙法⁴形式であると把握し、助動詞「ウ(ヨウ)」の性格を「非現実」領域に位置する事態を、単に一つの事態表象として思い描くだけの形式(以下、非現実事態構成形式と呼ぶ)であると把握することで、その多義性の構造を説明する。尾上氏の把握によれば、文というものは、概念を使ってものごとを語る以上、すべての文は「存在承認」か「希求」文であるという⁵。「ウ(ヨウ)」の終止法の場合、推量は「存在承認」、意志は「希求」の文と言えるのだが、「ウ(ヨウ)」での「存在承認」、「希求」には特殊性があるという。

尾上氏によれば、通常の助動詞はそれ自身が「存在承認」や「希求」をするのに対し、「ウ(ヨウ)」という助動詞は、その形自身はある事態を「非現実事態」だと言語化するだけであって、「存在承認」も「希求」も表さない。しかし、「ウ(ヨウ)」が発話の場に放り出されることにより結果的に文になってしまったら、文である以上、存在承認か希求にならざるをえなくなり、結果的に推量か意志の意味を帯びるようになるということである。このような「存在承認」、「希求」の表し方は一語文と同様であると把握する。例えば、「水」という名詞一語文を発した時、その一語が文脈に頼らず帯びる意味は「今ここに水がある(存在承認)」という意味か、「水がほしい(希求)」という意味に限られる。そのような「今ここにある」や「それがほしい」という意味は、もちろん「水」という名詞自身に含まれているものではない。同様に「ウ(ヨウ)」が終止法に立つということは、非現実事態の内容が放り出されたということであって、その内容が発話の場に存在しうるには「存在承認」か「希求」かの二つのあり方にしかならない。つまり、話し手の経験的現実の中にない事態が(いつかどこかで)存在することの主張、すなわち非現実事態の存在承認が「推量」にほかならず、それに対して非現実事態の希求がほかならぬ「意志」だと説明する。これに対し、非終止法でのあまりはっきりしない意味は、実は非現実事態を提示しているのみなのである。これはちょう

どさきほどの名詞「水」が「水を飲む」などのように一語文としてではなく文中で用いられた場合は「水」概念を提示しているだけなのと対応する⁶。

3. 韓国語における語尾としての意志、推量の助動詞

韓国語において意志、推量の助動詞にあたる語尾には、「li」と「keyss」の二つがあり、両者はともに意志、推量を表しうるという点で日本語の意志、推量の助動詞「ウ(ヨウ)」と類似している。

- (5) nwuka mwelayto nanun kalila (6) nwuka mwelayto nanun akeyssta
「行く」の語幹+li+文末語尾 「行く」の語幹+keyss+文末語尾
(誰に何と言われても私は行く)

- (7) nayilun pika olila. (8) nayilun pika okeyssta.
「降る」の語幹+li+文末語尾 「降る」の語幹+keyss+文末語尾
(明日は雨が降るでしょう)

3.1. 「li」

「li」という形式は、終止法では「意志」「推量」を表すのに対し、非終止法ではそれらの意味は出ない⁷。

- (5) nuka mwelayto nanun kalila. (誰に何と言われても私は行く)

- (7) nayilun pika olila. (明日は雨が降るでしょう)

- (9) issul⁸ lito epsnun kicekul mite pelyeyssta.

「ある」の語幹+liの連体形

(あるはずもない奇跡を信じてしまった)

- (10) issul suissnun ilinciepsnun ilinci capkoponi atulnomiessta.

「ある」の語幹+liの連体形

(あってよいことかあるまいことか、とらえてみれば息子だった)

例のように「li」は、終止法として用いられる場合には(5)(7)のように「意志」「推量」といった主観性が色濃く感じられるような意味が現れる。一方、非終止法ではそれ

らの意味は現れず、(9) (10) のようにあまりはっきりした意味は捉えにくく、あえて用法名をつけるなら(9)は「可能性」(10)は「妥当性」と呼べそうな意味である⁹。このような事実は、尾上氏が着目した「ウ(ヨウ)」の終止法と非終止法での意味用法の違いと完全に対応する事実である。このような点から「li」という形式も日本語の「ウ(ヨウ)」と同様に、形自身は「非現実事態構成」形式であると考えられる¹⁰。つまり、日本語の「ウ(ヨウ)」と同質の、非現実事態を言語化するだけの語尾として韓国語には「li」という語尾があると考えられるのである¹¹。

3.2. 「keyss」

3.2.1. 「keyss」の意味、用法

韓国語の述定形式のうち、いわゆる意志、推量などの意味を表す語尾には、前述した「li」以外に、「keyss」という形式がある。

(6) nuka mwelayto nanun kakeyssta. (意志)

(誰がなんと言っても私は行く。)

(8) nayilun pika okeyssta. (推量)

(明日は雨が降るでしょう。)

しかし、「keyss」には「li」では表せない次のような用法がある。

(11) cikwunun thayyanguy cwuwilul tolkeysskwuna. (道理、当然)

「回る」の語幹+keyss+文末語尾

(地球が太陽の周りを回るのが宇宙の真理なら、千年のちにも万年のちにも地球は太陽の周りを回るんだな)

(12) ipyelpota aphun ken epstako hakeyssta. (妥当、適当)

「する」の語幹+keyss+文末語尾

(別離より辛いのはないとするべきだ)

(13) han sikaney payklilato talanakeyssta. (可能)

「行く」の語幹+keyss+文末語尾

(一時間に100里でも逃げ切れる)

(14) nayka nelamyen kasskeyssciman, iceyn eccel su

「行く」の語幹+過去形+keyss+接続助詞

epsnunilita. (反実仮想)

(私があなたなら行っただろうが、もう後悔しても仕方ない)

(15) halwucongil ilul hayssteni phikonhay cwukkeysssta. (様態)

「死ぬ」の語幹+keyss+文末語尾

(一日中仕事したので疲れて死にそうだ。)

この事実は、「keyss」という形式は「li」とはまた異なった性格をもっているということを示唆しているであろう。

ここで日本語から大変興味深い事実を得ることができる。それは古代語の助動詞「ベシ」である。周知のように「ベシ」が表現上帯びる意味は極めて多様であることが指摘されており、しかもそれらは「妥当・適当」「可能」など、多くの用法が上であげた「keyss」の用法と対応しそうである¹²。

(16) 恋しとは誰が名づけむ言ならむ死ぬとぞただに言ふべかりける(古今六九八)―妥当、
適当

(17) 柳の葉を百度当てつべき舎人ともうけばりて射取る(源 若菜下四・一四六)―可能

多様な意味をもつ「ベシ」そのものの性格についても従来多くの議論が行われてきたが、その中で尾上氏は「ベシ」について、「ウ(ヨウ)」のように非現実事態を組み立てるだけでなく、非現実世界に確かに存在すると承認する形式、つまり「非現実事態承認」の叙法形式として捉える¹³。このような見方は前述の「ウ(ヨウ)」と「li」のように非現実事態のことを組み立てて放り出すだけの「構成形式」とは違って、非現実世界において確かに成り立つのだと保証をしっかりと与える、つまり、非現実世界において成り立つことと言葉の形自身が主張しているのだという捉え方である。これを参考に以下、「keyss」を、「非現実世界の事態の承認」という述べ方であると考えて、上で挙げた意味、用法はその述べ方が様々な用途に用いられた結果、文に生ずる意味として理解することはできるのか、検討してみる¹⁴。

3.2.2. 「keyss」の多義性の構造

α. 「非現実」の中身の細分化という観点からの整理

「非現実世界」といっても様々な意味での「非現実世界」があり得る。ここでは、その「非現実世界」という個々の内容に注目して、用法の位置づけを試みる。

α-1 現実とは接触しない非現実事態

「keyss」は非現実世界での事態成立を承認する形式だと考えるわけだが、非現実事態を語るということの中には、その事態が現実世界に実際に生起するか否かを問題にせず、ただ観念において成立するものとして非現実の事態を語る場合がある。それは個別の話者を超えて観念の世界で成り立つと主張することである。

α-1-1 道理、当然

いつ・どこでもそうなる、そうなっていると真理の世界で成り立つこととして、観念における事態の成立を主張する用法が道理、当然である。例文(11)は、宇宙の真理なら地球が太陽の周りを回るのは当然のことなのだとして道理、当然を述べる文である。

α-1-2 適当、妥当

そのことが適当、妥当なことであると価値判断を伴って非現実の事態の成立を主張する場合が適当、妥当の用法である。例文(12)は、「別離より辛いのはないと考えるのが適当だ、妥当だ」と述べる文である。

α-1-3 可能

ただ観念において成立するものとして非現実の事態を語ることの中には、例文(13)のようにその事態について実際にやるかやらないかは別にして、やろうとすれば、成立する情勢にあることを主張する場合があり、それが可能の用法である。

α-1-4 反実仮想

現実世界の状況とは異なる状況を観念上に敢えて設定し、その下では当の事態が成立することを主張する用法が反実仮想である。例文(14)は、「私」は「あなた」ではなく、また「あなた」は実際に、行かなかったという現実に対し、「私があなたなら」と、現実世界の状

況とは異なる状況を観念上に敢えて設定し、その下では当の事態（「行った」）が成立することを主張する用法である。

α-2 現実と接触する非現実事態

α-1 に対し、非現実の事態を語る場合、実際にこの世、事実世界に生起するか否かという関心のもとに語る場合もある。

α-2-1 推量

今のところ実現していない、話者の頭の中にある「非現実」の事態がいつか、どこかでこの世に生起、存在する、と主張する用法が推量である。例文（8）は、非現実の世界では「雨が降る」が成立するという主張を実際に事実世界に生起するか否かの関心のもとに語る用法である。

α-2-2 様態

目の前の事実から推理、推論の世界ではこういうことが成立つと主張するという限りでは推量と同じだが、そのような推理、推論をさせるような現実のありさまに表現上の力点がある用法である。例文（15）は、「疲れて死ぬ」という事態が今にも生起しそうになっていることを主張する用法である。

β. 非現実世界で存在するという主張から語用論的に意味を帯びる用法

「keyss」自身の性格は非現実世界での事態の成立を主張するというものであるが、そのような主張を通してある色合いを持たせることがある。

β-1 意志

「keyss」には意志の用法があるが、これは妥当、適当の用法を経由して現れるものと考えたい。つまり、「このような事態は妥当である」という主張を通して「だからこの事態を実現させたい」という話者の感情を伝達するというのが意志の用法であると考えるのである。

以上の例は古代日本語の「ベシ」でもよく指摘されている用法であり、「keyss」と「ベシ」の類似性が伺え、「非現実事態承認」という性格からこれらの用法を持ちうる論理が説明

できることを主張した¹⁵。しかし、韓国語の「keyss」にはこのほかに日本語の「ベシ」にはなさそうな以下のような用法もある。それについても「非現実事態承認」という性格から捉えられるかを以下で検討する。

β-2 「非現実世界で成り立つ」という主張の受け止め方—婉曲、強調

いままで「keyss」は「非現実事態承認」形式であるとしてきたが、現実事態を語っているのではないかとみえる(18)のような例もある。

(18) (「これで、この問題はわかったか」という問いに、「わかった」と返事する場合)

alkeyssta.

「分かる」の語幹 + keyss + 文末語尾

(18) では、話者は現に「わかった」のであって、そこにわざわざ「keyss」がついているのである。このような場合の「keyss」はなくてもほぼ意味が変わらないもので、ここでの「keyss」が何のために働いているかははっきりしない。ただ一般的には婉曲に働いているという論者や強調に働いているという論者もいる。実際、「anta」(「わかる」にあたるいわゆる動詞基本形) に対し、そのことを強調して強く主張したい場合には「keyss」の入った「alkeyssta」が用いられることがある。また、それとは逆に主張を弱め、表現を和らげたい場合にも「keyss」が用いられることがある。このように、「keyss」が用いられて、強調、婉曲という一見正反対の表現性が出てくる、という事実は、どう解釈すべきだろうか。現実事態のことを敢えて「非現実世界で理論上成り立つ」という形で主張した場合、その受け止め方には語られた内容の確かさという観点において正反対の二通りがあると考えられる。その一つは、ただ一回的な現実の描写でなく、理論上成り立つこととして語るのだから、ただ一回的な現実以上に絶対だという受け止め方である。もう一つは、所詮は理論上のことでしかなくて現実にはわからないのだから不確かであるという受け止め方である。つまり、現実世界に存在する事態をあえて道理の世界で主張することは単なる今ここの現実よりも確かに成り立つことと主張することにもなれば、理論上にすぎないため、結局には不確かだと主張することにもなる。その確か、不確かかの二つの方向がそれぞれ主張を強めるため、弱めるために用いられて「強調」「婉曲」の用法になると考える。

以上のような検討の結果、「keyss」という形式は、「li」が「非現実事態構成」形式であるのに対し、「非現実事態承認」形式であると考えられる。つまり、古代語まで視野に入れるなら、「ベシ」と同質の語尾だと考えられる。

4. 述語組織全体の対照研究に向けて

意志、推量を表す助動詞があった場合にそれらを意志、推量を表す道具とみるのではなく、その根底にある助動詞自身の性格というものを想定して、そこから結果的に意志、推量の意味が出ると説明するのが尾上氏の叙法論的把握である。そのような見方でとらえた場合に、「li」は「ウ（ヨウ）」（古代語では「ム」）のような非現実事態構成形式、「keyss」は「ベシ」のような非現実事態承認形式ととらえることができ、そのような把握からそれぞれの形式が持ちうる用法分化の論理を説明することができる。さらに韓国語内部の問題としては、尾上氏の叙法論的な見方に従うと、「li」と「keyss」がある程度似ている部分がありながら何かが違うということの両方を合理的に説明することができる。従来、「li」と「keyss」はともに大まかには推量の助動詞ということではできるが、両者の違いは何なのかということについては明らかにされていない。本稿では、ある程度似ているというのはともに非現実を語る語尾ということによるものであり、実際の用法に見られる相違点は構成と承認の違いであると解釈したことになる。このようにいわゆる推量の助動詞の把握には叙法論的観点の有効なのだが、このような観点の有効性は今回扱った非現実の助動詞（叙法形式）に限るものではない。

4.1. 尾上氏の日本語述定形式の全体像

助動詞を叙法形式（の語尾部分）として把握するという、尾上氏の見方は推量の助動詞、あるいは非現実事態を語る助動詞に限定されるのではなく、助動詞全体にわたるものである。尾上氏の助動詞観は一言でいえば、現実と非現実の語り分けをしているのが助動詞であるということである。尾上氏の立場からは日本語の述語形式というのは、「ウ（ヨウ）」は勿論、「テイル」「タ」、さらに助動詞なしの「スル」形も現実、非現実の語り分けの中に位置づけられる。まず、「過去」や「完了」の助動詞といわれる「タ」に関しては、非現実の「ウ（ヨウ）」に対して現実事態を語るという語尾であるという性格から「過去」や「完了」の意味が出るという。また、これら助動詞に準ずるものとして「接続詞＋存在詞」という語構成をもつ「テイル」という形があって、「進行」「結果状態」などを表すといわれるが、これも

尾上氏の述語観からすれば、現実事態を語る助動詞だと位置付けられる。さらに助動詞なしの「スル」形は助動詞がやるような現実、非現実の語り分け以前の単なる概念構成形式であるとする¹⁶。尾上氏は日本語の述定形式全てを、まず現実、非現実の語り分けをするものにとらえ、しかもその中には事態承認に対して「ウ（ヨウ）」（古代語の「ム」）のようにただ事態を構成するだけという特殊な形式があるという述語観のもと、次のように4象限を提示している。

〈表1〉日本語の述語形式の全体像¹⁷

	現実事態	非現実事態
事態承認	タ、 テイル	* ¹⁸
事態構成		ウ（ヨウ）
	スル（終止形）	

（*古代日本語では「ベシ」がここに入る。）

このように助動詞の本質を現実、非現実の語り分けとしてみることの有効性は、助動詞全体を体系的に位置付けることができるということにある。

助動詞が表しうる意味というのは、ある程度の偏りがある。それは大きく言えば時間に関わるものと、主観にかかわるものであり、それと同時に時間でも主観でもない「可能」「妥当」などのものがわずかにある。このようなことから時間の方をテンス・アスペクト、主観の方をモダリティと切り出して、切り出した範囲内の助動詞について集中的に議論することも盛んに行われているが、このような方法では、テンス・アスペクト形式とみられる形式と、それとは別個にモダリティ形式とみられるような形式が全体として「助動詞」という一つの語類をなしていることと理由を問うことはできない。しかも、助動詞が表しうる時間性や主観性といった意味の内部にもさらに偏りがある。例えば時間性というのは、積極的な語形変化で表されるのは已然、確定の側であるという偏りを見せる。同様に主観性とその他というものも例えば、主観性と言えそうな意味ならば何でもありうるわけではなく、ある一定の範囲に収まるものである¹⁹。それらの事実に対し、尾上氏のような把握からは説明を与えることができるのである。尾上氏によれば、助動詞が時間性を表し、しかもその時間性が已然、確定の側に片寄りをみせるのは、現実事態を語ることからもたらされる意味を「時間性」において捉えていたからであり、それに対して、ある部分に限定される主観性というのは非現実事

態を語ることに付きまとう主観性、さらに残るその他の意味というのは非現実を語ることのうち、主観性とは言えないものであると解釈される。

4.2. 韓国語の述定形式の全体像

韓国語のいわゆる述語の形式というのはまず、本稿で扱った「li」と「keyss」のほかにはいわゆる過去、完了などを表す語尾「ess」と「te」、そして語尾に準ずるものとして「接続詞＋存在詞」で語構成され進行、結果状態などを表す「ko issta」「e issta」、それにもっとも基本的な述語形態として「nun」がある。本稿の筆者は、韓国語の述語形式全体についても日本語と同様にその組織全体が現実、非現実の語りわけを成している叙法体系であると把握できると考えている。まず、日本語の「タ」に近いとみられる「ess」と「te」に関しての見通しを述べたい。非現実事態を語る助動詞が韓国語では「li」と「keyss」の二つあり、それを非現実を語る語尾のうち、構成と承認の違い（古代日本語では「ム」と「ベシ」）と位置付けたわけだが、これと同様のことが現実事態の側にもみられるのが「ess」と「te」なのではないかと考えている。両者はともに現実事態を語る語尾であるが、「ess」は現実事態承認、「te」は現実事態構成の語尾なのではないかという見通しがある。「ess」についてはすでに様々な研究に指摘されている通り、日本語の「タ」（尾上氏の把握によれば、現実事態承認）に極めて近い振る舞いを見せる。一方、「te」については韓国語学内部においても「ess」とどう違うかなども含めてまだ明らかにされていないことが多い分野であり、今後の研究課題であるが、日本語の「タ」とは異なる様々な制約が報告されている。「te」の特徴としては、終止法の場合、話者が知覚、経験しているなどの意味合いが常に付きまとい、その文が話者から独立して単に過去の事実を語ることはないという点がある。その意味で主観性が付きまとう表現だと言える。それに対し、非終止法ではそういった色合いは出ず、単に起こったできごとを提示するだけに見える。詳細は別稿にゆずるが、このような事実から「li」や「ウ（ヨウ）」がもっていた構成形式としての性格が現実事態を語る側で表れているのが「te」ではないかという見通しが得られ、現実側の語尾として「ess」が承認、「te」が構成形式と位置付けられるのではないかと考えている。次に、語尾に準ずるものとして「ko issta」「e issta」という形式があり、これらは意味の面では進行、結果状態などを表し、語構成の面から見ても「接続詞＋存在詞」であって、日本語の「テイル」と極めて似ている形式である。そこで詳細については勿論別途に研究しなければならないが、やはり日本語の「テイル」と同様に現実事態承認と位置付けられると考えられる。最後に、日本語の「スル」形のように最も

基本的な語尾「nun」についても日本語の「スル」形の用法との様々な対応関係が見られ、承認を与えず、現実、非現実の表し分けもしない単なる構成形式であると位置付けたい。最も基本的な、最も純粋に「単なる述語」であるものとはそのようなものであると考えるのである。よって、韓国語の述定形式は、全体として以下のような組織を成していると考えられるのである。

〈表2〉韓国語の述定形式の全体像

	現実事態	非現実事態
事態承認	ess, ko issta, e issta	keyss
事態構成	te	li
	nun	

日本語にも韓国語にも助動詞と言えるような語群があるわけだが、それら全体は現実か非現実か、また事態承認か事態構成かの語り分けの組織を成していると把握することがそれぞれでできると考えられる。そのような意味において両言語の助動詞は全体の組織においてほぼ対応すると言えるであろう。

叙法論的観点に立てば日韓両言語の助動詞全体が組織として対応するということが見えてくるのだが、韓国語をこのように4象限で把握するということの有効性乃至必然性は現代日本語以上にあると考えている。

現代日本語では語尾としての助動詞で非現実事態の形式と言えば構成形式の「ウ(ヨウ)」しかないの、事実上、非現実の叙法形式の中で「事態承認」形式か「事態構成」形式かを区別する必要はない。また、現実側の助動詞というのはすべて「承認」であって「構成」形式は存在しない。つまり、現代語をみる限りでは、実際上は非現実であることと構成であること、現実であることと承認であることが連動してしまうので、尾上氏の理論において「現実」「非現実」がイメージしやすい分、それとは独立に「承認」「構成」というのが実際どう違うものなのかイメージしにくい²⁰。

しかし、韓国語では、「非現実」の語尾として構成形式と承認形式の二種がどちらもあると考えられ、両者のふるまいの違いを解釈するためにこそ現実、非現実の区別と、また別の次元で「承認」「構成」の区別がどうしても必要な軸になるのである。逆の言い方をすれば、韓国語では一方の軸ではともに非現実でありながら、「承認」か「構成」かという軸ではさらに

分けられるという二つの形式が現代語に存在するため、それらの形式の違いをみることで、純粋に「承認形式」とは何か、「構成形式」とは何か、という議論が深められるのではないかと考えられるのである。述語形式を「現実」「非現実」に二分するというだけなら、大抵の言語においてやればできるだろう。しかし、それとは別に「承認」「構成」の軸を設けて4象限をとるとというのが尾上氏の叙法論の特徴であり、韓国語ではこの「承認」と「構成」の区分という要請がより切実なのである。ゆえに筆者としては尾上氏の文法論を援用し、韓国語の述語形態の全体像を組織として日本語と対照研究することを目指しているわけであり、上図の見通しのように全ての象限にそれぞれ形式がきれいに振り分けられる韓国語を対象に事実を整理し、議論を組み立てていくということが、この観点に立つ日本語の述語論の精密化、発展にも寄与することができると考えている。

1 本稿での韓国語のローマ字表記にはMartin et al. 1967の表記法を用いる。

2 尾上(1997a, b, 1999, 2000, 2001)参照

3 尾上(2004)では、現実領域というのは、話者がそこに立つてものを言っているこの世においてすでに起こってしまった領域、既実現の領域であり、非現実領域というのは、①この世で未実現の領域、②推理・推論、仮定世界など観念上の領域、③この世で既実現ではあるが話者の経験的把握を超えた「よくわからない」領域、の三者のことである、という。

4 尾上氏の「叙法」とはmoodの訳語であって、文を述べ上げるときの述べ方のさまざまに各形式が対応すると把握され、述定形式全体は叙法の組織として解釈される。

5 尾上(2004)参照

6 尾上(1999)参照

7 高永根(1997)、崔東柱(1995)では、非終止法では終止法の意志、推量といった意味は現れない、という指摘がある。

8 本稿では「l」を「li」の連体形とみる。このような見方は必ずしも韓国語学での共通見解にはなりえていないが、本稿では、「li」と「l」の音形態上の共通性に注目し、これらを日本語の動詞・助動詞における「終止形—連体形」相当ととらえた上で、「ウ(ヨウ)」と「li/l」を対照することにする。同じ立場のものとしては河野六郎(1979)があり、このようにみることの有効性と合理性については拙稿(2003a)を参照されたい。

9 非終止法の用法についてはこの他にも用法名をつけようとすれば他にも様々あげられるが、「ウ(ヨウ)」と「li/l」の全用法については拙稿(2004)を参照されたい。

10 詳しくは拙稿(2004)を参照されたい。

11 韓国語の「li」の全用法を詳しく見ると、日本語の「ウ(ヨウ)」とはわずかにずれも見られるが、それについても非現実事態構成という把握のもとに解釈することができる。拙稿(2003b, 2004)を参照されたい。

- 12 本稿での「べし」の用例は川村(1995, 2002)のものをそのまま引用した。
- 13 また、川村(1995, 1998, 2002)は尾上氏の考えを受け入れ、「べし」が表す様々な意味は、「観念上の次元における事態存在(成立)の主張」という述べ方が様々な用途に用いられた結果、文に生ずる意味だとして理解し、「べし」の多義性の構造を説明している。
- 14 用法分類をめぐっては川村(1995, 1998)氏の「べし」に関する分類を参考にしたが、それぞれの用法の位置関係とそれらの用法が表われる論理については川村氏の議論と一対一に対応するものではない。
- 15 その他にも「ベシ」と「keyss」の類似性は様々な面から指摘できるが、紙面上別稿に譲ることとする。
- 16 「する」形は、一般に未来形といわれることもあるが、その用法は必ずしも時間的に未来を表すとは限らず、中には特定の時間性を指摘できないものまであり、「する」形自身はあくまで特定の時間的意味を担う形式ではないと見る。詳しくは尾上(1982, 2000)参照
- 17 尾上(1997b)参照
- 18 現代語では、「助動詞」の範囲内に「文末外接形式」、つまり「ようだ」「はずだ」「そうだ」「にちがいない」のようなものまで入れるならばそれらは「非現実事態承認」に入るが、これらの形式は語尾、つまり本来の叙法形式とは別のものである。韓国語でも多様な文末外接形式が発達しているが、これらについては拙稿(2003b)を参照されたい。
- 19 尾上(2004)参照
- 20 尾上氏によれば、現代日本語の述語形式は叙法組織を成しているとはいえ、叙法的性格が衰退していて、叙法組織という面では古代語の述語形式の方がより豊かで整っているという。本稿でもあげたように非現実の助動詞として構成の「ム」に対し、承認の「べし」などが存在したという事実もその一例である。

参考文献

(日本語文献)

- 井上 優・生越直樹 (1997)「過去形の使用に関わる語用論的要因—日本語と朝鮮語の場合—」国立国語研究所編『日本語科学1』国書刊行会
- 尾上圭介 (1982)「現代語のテニスとアスペクト」『日本語学』一卷二号、明治書院
- (1997a)「動詞終止形と不変化助動詞の叙法論的性格」『文法懇話会発表』、尾上(2001)第3章第3節に収録
- (1997b)「叙法論としてのモダリティ論」『第6回CLC言語学集中講義』要旨、尾上(2001)第3章第4節に収録
- (1999)「文の構造と主観的意味—日本語の文の主観性をめぐって・その2」『言語』28巻1号、尾上(2001)第3章第6節に収録
- (2000)「スル・シタ・シテイルの叙法論的把握」『2000年度文法学会連続公開講義』要旨、尾上

(2001)第3章第2節に収録

- (2001)『文法と意味Ⅰ』、くろしお出版
- (2004)「主語と述語をめぐる文法」『朝倉日本語講座6 文法Ⅱ』、朝倉書店
- (近刊)『文法と意味Ⅱ』くろしお出版
- 李泓馥 (2003a)「現代韓国語の語末語尾の形態分析—日本語の連体形の用法から」『日本学報』56集、韓国日本学会
- (2003b)「現代日・韓国語の推量表現における叙法論的性格」、韓国日本語学会第10回大会口頭発表、韓国日本学会
- (2004)「리/≒」の多義性の構造—日本語の「う・よう」の叙法論的把握から」『日本語文学』20集、韓国日本語文学会
- 川村大(1995)「べしの諸用法の位置関係」、『築島裕博士古希記念国語学論集』、汲古書院
- (1998)「事態の妥当性を述べるべしをめぐる」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院
- (2002)「叙法と意味—古代語べしの場合—」『日本語学』21巻2号、明治書院
- 河野六郎 (1952)「中期朝鮮語の時稱体系に就いて」、東洋学報34-1-4「河野六郎著作集1」に再収録、平凡社
- 野間秀樹 (1998)「하갸다の研究—現代朝鮮語の用言のmood形式をめぐる—」『朝鮮学報』129輯、朝鮮学会(韓国語文献)
- 高永根 (1989)「國語形態論研究」, 서울대학교출판부
- (1998)「중세국어의 사상과 서법」, 탑출판사
- (2000)「표준중세국어문법론」, 집문당
- 나진석 (1953)「서상도움줄기 '리' 와 '갸' 의 교체」『국어국문학6』
- 최동주 (1995)「국어 사상체계의 통시적 변화에 관한 연구」서울대 박사학위논문
- 임홍빈 (1998)「{-갸-} 과 대상성」『국어문법의 심층1』, 태학사
- (その他)
- Martin et al. 1967. A Korean-English Dictionary Yale U. Press

(イ ホンボク 大学院人文社会系研究科 博士課程修了)